慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アクトン卿
Sub Title	
Author	鈴木, 錠之助(Suzuki, Jonosuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.335- 344
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0335

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アクトン卿

史家は博く學び深く考へ巧みに描くことを要求される。併し學者の研究が深くなるに從ひ、著作は益々困難となるやうである。蓋造詣するところ深ければ記事を割愛するに忍びなくなり、著述は勢尨大なるものとなるからである。編史の要訣は史的過程のうち全體に對して中心的地位を占むるもののみを選びて記述するにありと云ふことであるが、それが非常にむづかしい問題となるのである。

十九世紀史界の巨人アクトン卿に大作なかりしは、その博覽强記が煩ひしたといはれて居る。ブライス卿の著現代傳記研究の中にあるアクトン卿評論はよくこの消息を傳へて居るから、こゝにその一般を紹介することゝした。

アクトン卿が千九百二年七月十九日バヴアリアのテーゲルン湖畔にて永眠した時に、英國はその國民の最も眞實なる世界的の人を失ひ、歐羅巴はまた第一流の學者の一人を失つたのであるといふことは何人も承認するところである。彼はシユロツプシャーの羅馬加特力教を奉ずる舊家に生れたのである。その分家は以前南伊太利に行き其處に祖父將軍アクトンはナポレオン戰爭の時にはナポリ王の首相であつたのである。其の當時ブルボン王朝はシチリアにて英國艦隊の援助を得て僅かに體面を維持して居たのであつたが、全伊太利はナポレオンに屈服したのである。彼の父士爵フエルヂナンド・アクトンは中央ライン州の豪族の一つで、名高い舊家ダルベルグの相續者なる獨逸の婦人と結婚した。それ故ジョン・エドワード・エメリツヒ・ダルベルグ・アクトンは半、獨逸人として生れたのである。故に獨逸の最高貴族と血緣關係を有つことになつたのである。

彼は英國の二大羅馬加特力大學の一なるオスコ

ットにてワイズマン博士（後にウエストミンスター寺の監督及び大僧正（カーディナル）となつた人）の下に教育を受けた。併し彼の精神と道義の發達に最も著明なる感化を及ぼしたるは有名なる加特力の碩學デーリンゲル博士である。アクトンはミュニッヒにて數年間博士の薫陶を受けた。彼は嘗てカアローより選出されて暫時下院議員の席を占め（一八九九）、其の後ブリッヂノースより選出されたが（一八六五）、僅か一票によつて得た議員席を投票檢査のために失つてしまつたのである。當時加特力信徒が英國に選擧區を見出すは容易ならざることであつたゝめ、千八百六十九年グラッドストーンは彼を貴族に列したのである。アクトンは千八百九十三年上院にて演說し成功を收めたのであるが、彼は上下兩院の何れにも議會生活に於て卓越せる活動をしなかつた。これアクトンは自身あまり學究的なるを知ると共に他の英國政治家と異る見地より時局を觀たるによるのである。哲學者としても歷史家としてもまた獨逸仕込みの學問をもつてしても、アクトンは兩院の何れにも同情ある聽衆を見出すことが出來なかつた。議會に入つて間もなく何故に發言せざるやと問はれた時、アクトンは自分は何人とも一致しないし、また何人も自分に一致しないからだと答へたと云ふ。併し政治を現在に於ける構成の過程にある歷史と觀じた彼は、生涯いたく政治に興味を有ち事毎に注目し、批判するを怠らなかつたのである。アクトンと多年莫逆の友であつたグラッドストーンは或る機會にアクトンを重要なる地位に据ゑんとしたのであるが、政治上の急變のためにそのこと成らずして止んだ。故にアクトンが曾て得たる唯一の公的地位は千八百九十二年の内閣に於ける侍從職たるに過ぎなかつたのである。この資格により彼はヴィクトリア女皇に屢近侍することを得た。女皇はアクトンを少なからず稱讃されたのである。アクトンは歐洲大陸の多くの宮廷と親しみ深き少數の近侍の一人であつたから、女皇とそれらの宮廷に於ける時めく人々に就て親しく評論することを得たのである。ウキンゾルに於てはアクトンは始終宮城の書庫に於て書見に時を費した。此間彼は女皇に實

際近侍することを要求されなかつた。これ侍從職に於ける希代な現象と云ふべきである。

多くの羅馬加特力信徒と違ひアクトンは鞏固なる自由黨員であつた。即ち千八百四十七年より千八百八十五年迄勢力を占めたる個人主義、自由貿易、平和愛好を主張する正統派型の自由黨員であつた。彼はまた確固たる自治論者であつた。グラッドストーンが自身自治論者になつた以前疾くに愛耳蘭自治主義を採用してゐたのである。抑々アクトンの自治主義の信念は、自治は國民の政治的才能と訓練と發展との手段として價値ありと云ふこと及び國民の感情は他の自然の諸勢力の如く指導されるときは有益となり、抑壓されるときは有害となると云ふ彼の主張する認識に基くのである。それ故アクトンの自由主義は自由に對する愛好がその根柢をなし、自由は憲法及び民福の鞏固を保證する最良の基礎なりと云ふ確信がそれに附け加つて居るのである。自由の力に信賴するといふことは彼が讀史より學べる最大なる教訓の一なりと常に稱して居た。彼はその考を宗教上にも政治上にも等しく適用したのである。

千八百七十年のヴァチカン會議の際にはアクトンは一平信徒であつたとは云へ、法王無謬説の教條の宣誓に反對したる加特力教會自由派の錚々たるものであつた。アクトンの該博なる教會史の知識は當時列席したるジュバンルー大僧正ストロッスメーヤー僧正コノリー大僧正等の非常なる援助となり、その羅馬教大會議に於ける嶺南派即ち法王黨との長き生氣ある論戰に異彩を放たしめたものである。少くともその爭論文の一篇及び會議に表はれたる文書の多くは彼自ら筆を執りしものか又は彼の供給したる材料によつて書かれたものである。アクトンは嶺南派の人々殊に大僧正マンニングからはデーリンゲルと共に黒幕に於ける反對者中の最も强敵なりと見做されて居たのである。

世人の知る如く、此の會議は無謬説派即ち法王方の勝利となり、教會はこのため分離して獨逸及端西に於ける舊教會の組織を見るに至つた。その結果デーリンゲルは破門されたが、アクトンに對

しては何等の沙汰なくすんだ。アクトンは千八百七十年に主張せる見解を持しながら、終生羅馬教會の忠實なる信者であつたのである。

多忙なる實生活を營み且又世界の政治殊に英國及び合衆國のそれに絶えず興味を有つて居て、而かも模範的の學者となれるアクトンの勉學は、凡庸の企及し能はざるところである。アクトンの學問は殆んど奇蹟ともいふべきものであつた。自然科學及びその實際の應用に就いては彼は世の教養ある人士が所有する樣豫期せらるゝ以上の知識は有つて居なかつた。併し所謂人事の問題（ヒューマンサブジェクト）に就てはその造詣の深きこと他にその比を見なかつたのである。學問は彼の畢生の事業であつた。アクトンは生來非常なる强記の人であつた。而かもその勤勉なる孜々として倦むことを知らなかつた。アクトンは到る所、或は倫敦に、或は冬期カンヌに、或は夏期テーゲルン湖畔に、或は女皇に侍してウキンゾル又はオスボーンに、或はまた後年（健康の衰へる迄）大學の學期中ケンブリッヂに於てその勉强は一日八時間を下ることなかつた。彼の記憶力と勤勉とを充分に參酌しても、尙ほ彼の友人はアクトンの知識の範圍の廣汎なると正確なるとにいたく驚嘆したのである。彼の知識は多方面なると同時に深邃であつた。その造詣するところ多くは現今少數の人士と雖研究をよくせざる難解の事象のみであつた。その古代及び中世初期の世界史に於ける研究は近世史に於ける造詣の精細なる程に及ばずと雖、その知識は政治、宗教史の全般に亘り、殊に文藝復興及び宗教改革時代に於ける研究の精密にして該博なる洵に人をして歎賞措く能はざらしめた。彼の聖書知識は古代の神學より近代の高等批評にまで及んだ。また哲學の知識は特殊の意義に於ける形而上學のみならず、獨逸人の大に珍重したる純理經濟及び法理の問題をも包括した。此の種の學問の進歩に大に力をつくした十九世紀末葉の卓越せる學者、例へば史學に於けるランケ、フユステル・ド・クーランジュ、經濟學に於けるキルヘルム・ロッシャー、神學に於けるアドルフ・ハルナック等は何れもアクトンの友人であつた。而かもアクトンはどの專門に於ても是等

の學者と對立するを得たのである。或る折予（ブライス卿）はアクトン卿と會するため、當時法王史著作中なりし故クレートン博士（後に監督となつた）及び英國に於て最も優れたるヘブライ及びアラビヤ學者なりし故ロボルトソン・スミス教授を正餐に招待したことがあつた。この時談先づ法王レオ十世の時代に始まり次いで舊約聖書作成の年代に關する近時の論爭に及ぶや、アクトン卿の知識は前者に就いてはクレートン博士に等しく、後者に就いてはスミス教授に劣るところないといふことが忽ちにしてわかつた。

合衆國の憲法史はアクトンが大部分の時代を費して研究したる哲學、教會史、神學等の方面より大分かけ離れた題目なるが、彼はそれすら少くとも英佛兩國に生存せる當代の歐洲人より精通して居たのである。彼は時々出版せらるゝ米國憲法に關する主なる書は常に讀破して居た。故に彼は歴史殊に教會史及び歐米に見はるゝ政治學の原理に關し有名なる參考書は殆網羅したのである。アクトンは不勉强の友人等が繙讀に値せずと思惟した書物まで目を通した程の多讀家であつた。故に友人等はアクトンを貴重なる指導家となし、凡ての問題に關しその參考となるべき文献を質ねたるはいふまでもない。殊に歴史の範圍に於てはアクトンの知らなかつた書籍は、知る價値のない本といふも差支へなかつたのである。時とするとアクトンは親しく研究書目に就て教を乞ひに來た人々に、其の人々がその道にかけてはかなり明るいのに拘はらず、その專門家さへ未だ曾て聞き及んだ事のない樣な參考書を指示することが屢出來たのである。彼は一時に四個の書庫を所有して居た。その最大なるものはシユロツプシヤーのオルデンハムの家庭に、他はテーゲルン、カンヌ、及び倫敦にあつた。彼は指名された書物はその何れの書庫に在るかをよく記憶して居た。

自分の藏書を大切にし所謂愛藏門外を出でずなど稱する人々と異り、アクトンは書物を他に貸すことを好んだ。而も友人に書物を貸し數週過ぐるとき次に何を貸さんかと迫ることすらあつた。友人は怠慢未だ讀み了らぬ中に追ひかけらるゝので

恥ぢ入る次第であつたといふ。斯く云つてもアクトンは世間の普通の意味に於ける書物蒐集家でないことは勿論である。彼は好事的に稀覯の書物を集めたりすることは決してなかつた。況して裝釘などには全然彼の注意を向けなかつたのである。

アクトンの家庭なるオルデンハムの書庫はそれのみにて黽勉努力の紀念碑であつた。その書庫完成のために、アクトンは教會及政治界に於ける思想及び制度の發達を知るに必要なる書物を蒐集せんと苦心した。この目的を達するため是等の廣汎にして複雜なる問題を取り扱へるものは單に最良の論文のみならず、大は歐洲諸大國及び教會の一般史に關する記錄、小は伊太利佛蘭西の如き諸國に於ける市町村の地方史に關する根本的の文書を多數探訪したのである。彼はこの宏大なる企圖を四十才前に完成したのである。而して猶驚くべきはアクトンが是等の書類を利用する時間があつたことである。それ等書類の殆ど全部は鉛筆もて註又は記號の書入れがなされて居ることである。彼は自分の目的に必要なる部分は悉く通讀して其の內容を知つて居たのである。

（この藏書はアンドリユー・カーネギー氏これを購め、氏はジョンモーレーにこれを呈し、モーレーはケンブリッヂに寄贈した）

アクトンは造詣が斯くも深きに拘はらず、その學問は少數の親友にのみ示されたのであつた。一般社會は彼にそんな深い學問ありとは知らなかつた。世間の目にはアクトンは文學と政治に趣味を有ち、談るより聞くを好む教養ある愉快な人としか見えなかつた。彼は時に態度を曖昧にして人の誤謬に皮肉の言を投ずることが出來ないでもなかつた。而し皮肉に對する大なる才能は、道德に對する、より大なる尊敬あつてこそひとり才能として存するものであることを知つて居た。公衆の中にてアクトンは充分の學力を示したことはなかつた。唯自分と趣味の合ふ人々と親しく談を交ふる際には彼の氣品と教養は自づと表はることがあつた。彼の批評は微妙にして嚴重であつた。その批判はむしろ嚴格に過ぐると云はれた。何人も現代若しくは過去の政治家の行爲にアクトン程嚴重な

る道德的標準を適用した人はない。ケンブリッヂに於ける歷史の開講に際し、史家の第一の任務として彼は斯くの如く述べた。曰く「史學の任務は人間及び事物の公平なる基準を律するにあり」と。アクトンは著作の價値の評價に於ては容易に自己を滿足せしむることが出來なかつた。何となればそは實質に於て透徹し、形式に於て整然たるを要するが故に、その理想に達するの困難なるを認めたからである。而し彼れの親友は何れも彼の技倆を認め賞讃の辭を惜しまなかつたのである。前述の批判の嚴正と云ふことはアクトンの思考の精密と趣味の氣むづかしいのに由來するのであるが、その見解は英國人には特に教訓と光明とを與へた何となれば血緣上は半英國人であるが、其の訓練と精神的習慣は英國人よりもむしろ獨逸人に近かつたからである。彼は倫敦に於けると同じく、巴里にも伯林にも羅馬にも其の生活を送つたのである。故に殆んど同等の容易さを以て是等四ヶ國語を自由に操り、是等の首府に於て識るべき價値ある知名の士とは何れも親しく往來して居たのである。アクトンは新教徒間に介在する一加特力教徒として、牛津及劔橋の學者間に於けるデーリンゲル及びロッシャーの門弟として、また世界市民の一人としての特別の立場より英國の島國的文學と政治とを觀察したのである。その歷史及び哲學の造詣は一般人類に關し非常に廣き見識を彼に與へたのである。

史眼炬の如しとはアクトンの場合には決して溢美の言葉でない。光明裡に經過したる事件の說明は暗黑裡に經過したる事に見出すべきものなりと主張する彼の史觀は注目すべき特徵である。彼は密室を開くべき鍵を常に覓めて居たのである。大なる階段は只群衆を欺く虛飾に過ぎず、實際の行動は背面のかくれたる通路に行はれると信じた。アクトン程過去の漫評に通じたる人はなく、また現代のそれに傾聽したる人はない。アクトンはそれをも史料の參考に加へたのである。

獨逸の教育が養成したる知識慾は遂にアクトンに障害をもたらした。何となればそれは彼の述作力を妨げたるが故である。學問が彼れの精神の高

翔する羽翼の邪魔や負擔になつたのではない。知識獲得にあまり多くの時間を費したるがために、著作する時間がなくなつてしまつたのである。（師デーリンゲルはアクトンが四十才に達する前に大著作をせざれば最早其の機會なからんと危んだ）アクトンは一の題目に關し起草せんとするにも、それに關する他人の著作の全部若しくは殆んど總てを渉獵しなければ執筆することが出來ないと考へた。これがためアクトンは繙讀したる書物の拔萃を作る習慣を作つた。即ち參考となるべき部分を小なる紙片の上に美しく整然と拔萃し、それを題目に從ひカード箱の中に整理して置くのである。彼は此の種の箱を數百所有した居た。たとへ其の内容は疑もなく貴重なる物にせよ、その拔萃に費したる時間を思想發表の方面に向けたならば大に學界を益したらうと思はれるのである。

今のそ拔萃の一例とした彼れが講義の始めに引用したる語句を見んか、その引用句の多くは何れも貴重なりと雖、詮ずるに同樣なる思想がたゞ異る人によつて言葉をかへて表はされたるに過ぎない。この過度の引用句を以て飾られたる彼の論文を讀むときは、讀者は皆アクトンの獨創になる部分が實質に於ても亦形式に於ても先進の言より優れりと思はれるのである。修史の要訣は何を省略すべきかを知るにある。それ現代に於ては多くの問題に關する參考書を遺憾なく研究するは不可能であり、殊に最近の二世紀の如きに至りては根本的のオーソリチーさへ凡てを網羅するは到底不可能であるからである。而し少くとも一通り渉獵しなければ省略の仕樣がない。アクトンは何物をも等閑に附することを欲しなかつた。故に彼の如く熱誠に完璧を期する人は必要上三人前も生きなければならないことゝなり、結局大望は實現を見ずして終るのである。

アクトンの知識に對する好愛は遂に熱情とかはつた。恰かも灼くが如き砂漠の中に水を求むる渴した人の如き有樣となつた。彼が知らんと欲したるものは單なる事實のみでなく、原理に關係ある事實即ち史的認識に達するやう因果關係を說明するが如き事實を覓めたのである。この目的のため

に諸種の出來事は人の思想より以上に重要なるものではなかつた。何となれば多方面に渉る創造的の思想をアクトンは歴史に於ける主なる要素と考へたからである。故に哲學的創造及反省の書物は史實を載せたる記錄に劣らず精通する必要があつた。併し此の種の考は危險を伴はないではない。何となれば各人の表現したる言行思想の全部が或は意義ある事實となりはせぬかと云ふことゝなり、且つは此の如くんば眞理の探究は材料無限なるが故に果てしなきことゝなるからである。

アクトンの過度ともいふべき細心と、殆實現され得べきもない理想とは益々その述作力を鈍らした。アクトン稀世の博識もその著述乏しきため、後世の人は誠に知る由がないのである。青年時代には一時、内外評論、時事評論、北英評論等に關係し屢寄稿したことがあつた。また、千八百六十八年と九十年との間には新聞紙に多少の史論または匿名の評論を執筆したこともあつたが、併し創作的の作物は次第に發表を嫌ふものゝ如く見えた。千八百九十年頃友人等の切なるすゝめにより、一度發表したる論文集を一卷となして發刊することを約したるが、それらを數年改訂修補したる後斷然其の企圖を放棄してしまつた。これよりさき千八百八十二年アクトンは既に自由史の大著をものする計畫があつたのである。併しこれも亦沙汰止みとなつた。何となればこの目的のために廣く讀破すればする程その企圖は擴大されて際限がなくなつてしまつたからである。アクトンには多くの高遠なる文學的理想を抱く人々の如く、The Better proved to be the enemy of Good. となつたのである、

アクトン卿は二十餘年前に夜晩くカンヌの書齋にて予に自由史述作の計畫に就いて話したことがある。其の時僅か數分間の會談に過ぎなかつたのであるが、アクトンの透徹せる史眼と考察とは予をして贊歎措く所能はざらしめたのである。

アクトンの文體はその後年の作はあまりに引用該博思想豐富なるがため往々明晰を缺くことがあつた。されど特別に深き研究を要せざる項目を論ずるときは、その文體は簡勁にして寸鐵人を殺すの趣があつた。

大學教授としてのアクトンの講義振りは流暢と云ふことは出來なかつた。その精確にして缺陷なき講義案も年若の學生には難解のものであつたこの點に於て彼の先進なる劍橋史學教授ジョンシーリーは知識獨創及巧緻とに於てはアクトンに及ばなかつたと雖、その講義と述作はよく要領を得てゐたのである。併しアクトンの講義もその遺稿を見るに、豐富なる思想に滿ち、明瞭にして力ある模範的の記錄と稱することが出來る。

人物や記錄を批判する際にあらはれたるアクトンの氣質の嚴格は、決してその子弟關係に影響しなかつた。時間はアクトンには最も貴重なるものであつたけれども、子弟のためには惜しげなく割いて誘掖したのであつた。師の學問の蘊奥の測られざるは子弟等の驚異とするところであつた、その一人が或る時予に談るやう「アクトン先生が質問に答へらるゝ時は、私はピラミッドを仰視してゐる樣に感ずる。その論旨の鋭さはその尖端に比すべく、その知識の該博確實なることその根柢の雄大動かざるに似たり」と。されば斯の如き廣き見解と深き學問と自由なる心情とまた眞理に對する不斷の努力とにより、アクトンが學生に與へたる印象は頗る深く、その效果は著しいものがあつた。

友人は皆アクトンが深く藏して發表すること少きを惜しんだ。アクトンの思想を永續的の形式にて廣く一般に傳へることの出來ないのを遺憾に思つて居た。これ恰も片舟も寄らざる離れ小島に人知れず花咲く木にもたとへられやう。何人もその美花を眺むるなく、その種は沃地に移されずして空しく朽ち果つると同樣であつた。

多くの人々にはアクトン卿は公聞と衆望とをさけ只管知識を覓め思索に耽つてゐた一學究と見えたであらう。併し彼は交際に長け友誼に厚く氣品高く、日常生活に於て責むべきところがない紳士であつた。彼の名は同鄕の人と雖知る人は少なかつた。世人はアクトンはグラッドストーンの腹心の友であり、政治上神學上自由主義を抱く眞面目なる一加特力教徒と思へるに過ぎなかつたのである。されど親しく彼と友誼を結びたる人々は、アクトンは當代に於ける第一の碩學であり、その研究したる凡ての問題に就いては他に彼と比肩し得るものは殆んど無いことを認めて居たのである。

鈴木錠之助